

現代英語に底流する性差別

上 利 学

Gender Bias Ingrained in Contemporary English

Manabu Agari

0. はじめに

現代の欧米社会では、男女平等が常識となっていることは言うまでもない。しかしながら、英語には男性中心的な考え方が根底に残っており、性差別的であるとの誹りを受けてきた例は枚挙に暇がない。男性中心的な英語に疑義が呈されて以降、特に人称代名詞は大きな注目を集めてきた。例えば、‘Everybody thinks he can make money’のような文では‘Everybody’に性差はないが、これを指示する代名詞が‘he’である点が問題視された。これは、英語には性差の区別をしない単数の人称代名詞がないためである。‘he or she’のような形も考案され、形式張った文体では一般的になっている一方で (Swan §328), 長いために使用を避ける人もいれば (*Longman Dictionary of Contemporary English* (2014): s. v. *they*) (以下 *LDCE*), 繰り返し用いると不恰好にもなる (Miller and Swift 53; Crystal 2018: 390)。複数形の *they* は性差の問題を解決するが、数の一致という文法規則を破ってしまう。しかし、単数の *they* は過去数世紀に渡って教養ある人たちの話し言葉では一般的であっただけでなく (Swan §328), Fielding, Austen, Dickens などの著名な作家の作品でも使われていた (寺澤 2008: 184)。

現代英語では数の一致という文法規範よりも男女平等が重視されるため、*they* が優勢になりつつあるようである。Carter & McCarthy によれば、*person, someone, anyone* のような語では *they* の使用が一般的である (§198d)。*LDCE* によれば、*they* は話し言葉では一般的だが、書き言葉でも益々容認されてきている (s. v. *they*)。人称代名詞の *they* は目立たない機能語に過ぎないが、*Merriam Webster* が、検索数が最も多い語に与えられる ‘Word of the Year for 2019’ は *they* であると発表すると、人称代名詞の初受賞に注目が集まった。検索数は前年度に比べて313%増加し、*everyone* のような名詞を受ける指示詞として、ソーシャルメディアや会話だけで

なく出版物においても確立した用法になったとする (*Merriam-Webster*)。総称の *he* は一般読者向けに書かれた『英語の歴史』(183-86)でも詳しく解説され、2020年に刊行される Dennis Baron による *What's Your Pronoun?: Beyond He and She* も総称の人称代名詞を中心テーマとしているように、英語の性差に関する議論は現在でも活発である。小論では、現代英語における使用状況を頻度の観点から把握し、性差別語が中立的な語に移行する過程を観察することによって、性差に関連する語を取り巻く変化の実態を捉えることを目的とする。

1. 政治的妥当性

The Oxford Dictionary of New Words は *political correctness* (政治的妥当性) を以下のように定義している。

Conformity to a body of liberal or radical opinion on social matters, characterized by the advocacy of approved views and the rejection of language and behaviour considered discriminatory or offensive. (239)

Geoffrey Hughes は上記の定義を *authoritative* とする一方で、用語の使用に関する問題点を指摘している。つまり、‘conformity’, ‘approved’, ‘considered’ の主体が明示されていないため、誰に承認された見解に従うのかが不明である (13)。さらに、‘correctness’ は同意に基づく基準や慣習に従うことを示すが、「文法的正しさ」のように、同意された明確な意味は持っていないという問題点も指摘している (17)。用語の定義が難しいことに加え、*political correctness* (以下 PC) が扱う範囲は、人種、民族性、障害、病気、精神疾患、ジェンダー、性的志向、外国人嫌い、環境、動物の権利、麻薬中毒など非常に多岐にわたるため (Hughes 58)、厳密な定義を規定することは難しく、また益するところも多くはないと思われる。したがって、本稿では PC を、白人を中心とする社会の中で社会的弱者に対する差別的、侮蔑的表現を避ける配慮及び表現、と定義しておく。

1980年代には人種、ジェンダー、性的指向、環境保護、身体的・精神的発達の領域において偏見と見做される表現の根絶に関心を持つ人が増えた (Crystal 2018: 189)。特に、性差別のない表現を使用する動きは1980年代中頃までに勢いを増していたため、性差のない語の使用は書き言葉における「流行」となった (Miller & Swift 2)。

PC が扱う領域は広いため、本稿では取り分け重要な性差別に焦点を絞って考察を進めたい。まずは、PC に関連してしばしば言及される例として総称の *man* を取り上げよう。人間一般を示す語であれば当然女性を含むが、「男性」の意を持つ

man の使用は女性を排除しているとして問題視されてきた。*The New Oxford American Dictionary* (2005) によれば、総称用法の man の使用は、現在では性差別主義的あるいは時代遅れとされ、the human race や humankind が代用語として挙げられている (s. v. man)。これらの代用語は現代のアメリカ英語でどの程度用いられているのかという点については Corpus of Contemporary American English (以下 COCA) を用いて調査する。

COCA は1990年から2017年までを範囲とする 5 億 6 千万語からなる現代アメリカ英語の言語資料を指し、話しことば (ニュース)、フィクション、大衆雑誌、新聞、学術誌などの言語媒体から、各年 2 千万語で構成されるバランスの取れたコーパスである。例えば、総称的な意味を持つ man の代用語の頻度は the human race (1,415), humankind (1,819), humans (23,615) のようになっている。一方、man- を含む複合語 mankind (3,336) は比較的高い頻度を示しているため、今なお一般的に用いられているという印象を与える。しかしながら、Corpus of Historical American English (以下 COHA) を利用すれば、類義語の使用状況に関する歴史的推移を辿ることが可能となる。COHA は1810年から2009年まで、10年ごとの頻度を示した 4 億語から成る言語資料である。表 1 に示すように、過去200年の mankind の使用状況に目を向けると、1840年代を頂点として頻度は徐々に下がり、1990年代には1980年代から半減している。これは男女平等の考え方が語の使用頻度の推移に色濃く反映されていることを物語っている。

表 1 mankind (12,150) の年代別頻度 (上段：年代, 下段：頻度)

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
194	491	797	1224	998	931	763	772	617	586
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
701	703	537	515	515	433	490	465	215	203

一方、性差のない人間一般の意味を持つ語の使用状況は以下の通りである。

表 2 the human race (2,716) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
15	50	176	226	158	208	210	203	158	139
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
111	132	137	162	122	128	104	101	101	75

表 3 **humankind** (484) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
	5	4	1	1	6	7	7	8	21
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
26	14	15	12	11	15	26	68	109	128

表 4 **human beings** (6,153) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
3	98	135	171	219	254	229	204	229	251
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
338	465	419	467	433	427	441	469	506	395

表 5 **humans** (4,217) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
		3	1	1	5	3	1	6	25
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
43	109	101	85	199	221	371	628	1,200	1,225

表 6 **people** (367,093) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
920	4,249	9,181	11,585	11,981	13,858	13,785	16,974	17,785	16,328
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
16,518	18,305	20,279	22,465	22,352	23,582	27,112	30,204	34,610	35,020

年代別に見ると, humans の頻度が20世紀終盤から上昇しているのに対し, humankind は増加傾向を見せてはいるものの, 頻度が非常に低いため日常的に使われているとは言えない。human race と human beings は中立的な語であるにもかかわらず, 21世紀前後には頻度が減少している。これは同じ意味の場に属する語が複数存在する中, 頻繁に使われる語が一部の語に収斂している過程を示しているのではないかと思われる。例えば, human race は性差のない語であるが, race は人種差別を想起させる語であるため使用頻度が低下した可能性がある。この点に関して, 『ジーニアス英和大辞典』(2001) は「人種にまつわる問題を避けるため, 近年はこの語を使わず, people(s), community などの語で代用する傾向がある」と説明している(s. v. *race*²⁾)。類義語の使用が一部の語に限定されるもう一つの要因として, 簡潔さが挙げられる。humans は human race や human beings と比較すると, 一語である

ため語の長さが短く、従って使用に際して効率的である。people のデータは「人間」以外の意味を含む例があるため断言はできないが、簡潔さ及び日常語である点を考慮すれば、性差のない語として今後、使用が増えると考えられる。

総称用法の man の他に、語中に man を含む語も差別的だとして批判の対象とされてきた。接頭辞に man- を含む manpower は労働力として使用されてきたが、女性が社会に進出し従来は男性が占めていた地位に就くと、その社会状況の変化が言葉の平等化を求める契機となった (Miller & Swift 2)。COCA によれば、男性中心的な manpower が 1,535 例あるのに対し、staff (75,820), personnel (19,014), workforce (5,692), human resource (2,837) のように性差のない語の頻度は極めて高く、現代英語では一般的であるといえる。過去200年の推移は以下の通りである。複数形がある場合は単複を合わせた数を示す (以下同じ)。

表 7 manpower (1,651) の年代別頻度 (1900年以前の例はない)

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
8	44	13	559	296	326	231	117	47	45

表 8 workforce (331) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
									1
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
						3	13	116	198

表 9 human resource (407) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
1			1	2	1			1	
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
3	2	11	8	7	50	57	46	130	87

表10 personnel (6,542) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
	1	4	1	5	10	18	29	50	82
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
129	307	516	833	784	888	848	792	640	605

表11 staff (25,629) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
16	52	191	283	253	426	374	406	674	483
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1,025	930	1,251	2,128	2,388	2,325	2,970	3,446	2,658	3,349

manpower は第二次世界大戦に重なる1940年代をピークとして、80年代以降急激に減少する一方、この現象を補うかのように workforce と human resource が頻度は低いものの増加している。しかしながらこれらの語は、20世紀中頃に増加した personnel を含め頻度が高い staff に押されたためか、頻度は低いままか又は減少している。日常語である staff の頻度の高さは、一音節という簡素さと相俟って今後も続くのではないだろうか。

接尾辞に -man を伴う語も一般に知られた例であるが、COCA によると、語によっては性差別語と PC 語の割合に違いがみられる (表12)。

表12 接尾辞 -man

性差別語	PC 語
repairman (496)	repairer (45)
freshman (12,336)	first-year student (70)
spokesman (18,354)	spokesperson (2,860), spokeswoman (6,246)
congressman (18,382)	congressperson (103), congresswoman (2,357)
statesman (2,211)	statesperson (8), stateswoman (18)
chairman (37,715)	chairperson (671), chairwoman (1,142)
fireman (2,259)	firefighter (6,973), firewoman (3)
policeman (6,804)	police officer (15,294), police woman (25)

fireman/fireperson, policeman/police officer のように PC 語が優勢な例がある一方で、多くは男性形が圧倒的に優位である。これは政治家や議長など社会の上層部に属する女性の数が依然として少ないことと比例しているように思われる。表13から表18は、fireman と policeman の PC 語を含めた過去200年の頻度の推移を示す (COHA)。

表13 **fireman** (1,230) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
		28	85	91	75	105	96	246	353
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
230	343	275	335	315	366	287	155	122	178

表14 **firefighter** (651) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
								1	
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
	3	2	39	8	8	36	97	76	302

表15 **firewoman** (2) の年代別頻度

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
	1				1				

表16 **policeman** (12,666) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
	3	1	32	128	140	291	387	698	952
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
793	1,421	1,302	990	1,075	1,382	1,485	624	488	464

表17 **policewoman** (238) の年代別頻度

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
	11	17	10	28	39	81	19	10	23

表18 **police officer** (1,948) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
15	5	6	76	21	9	24	17	26	51
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
35	55	94	52	77	152	210	268	312	433

表から明らかなように、fireman と policeman の頻度が1980年代から急激に減少する一方で、firefighter と police officer が急増している。ところが女性形の policewoman は増加せず、firewoman に至っては僅か2例である。Miller & Swift によれば、

-woman を含む複合語は現代英語では避けられる傾向があり、その理由として次のように述べている。

Perhaps *chairwoman* sounds less important and *spokeswoman* less authoritative than their masculine-gender counterparts. This could explain why some women who achieve positions of leadership still call themselves 'chairmen', a term already invested with prestige and power by generations of male incumbents. (33-34)

つまり、*chairwoman* には *chairman* ほどの威厳がないため、女性議長の中には男性の威信と権力を纏った *chairman* を使う人がいるという見立てである。この見解は、*chairman* (37,715) の高い頻度とは対照的に、*chairwoman* (1,142), *chairperson* (671) の頻度の低さにも裏付けられる。さらに、年代別の頻度 (COHA) を見ても *chairwoman* や *chairperson* が積極的に使われている様子は窺えない (表19～表21)。

表19 **chairman** (24,642) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
1	51	135	277	139	212	329	409	623	814
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
762	2,077	3,131	2,254	2,932	2,896	2,658	2,557	1,502	1,379

表20 **chairwoman** (118) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
						1	1	1	4
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
	1		3	3		11	12	41	40

表21 **chairperson** (89) の年代別頻度

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
						4	13	54	18

chairman の使用は近年減少してきているものの、*chairwoman*, *chairperson* の頻度の低さは、二つの PC 語が *chairman* ほどの威厳を持たないという Miller and Swift の見解を裏付けていると言えそうである。表22～表24が示す通り、社会的に高い地位とされる *congressman* 及びその PC 語についても同ような傾向が見られる。

1990年以降, congressman の頻度の減少傾向に歯止めが掛かる一方で, congresswoman の頻度が伸び悩んでいるのは, 男性形が社会的な威信を保っているためであると見てよいだろう。

表22 congressman (6,091) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
	1	16	10	12	49	261	233	173	236
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
237	391	376	509	570	792	811	671	375	388

表23 congresswoman (148) の年代別頻度

1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
						1			
1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	5	8	10	11	5	1	25	37	24

表24 congressperson (12) の年代別頻度

1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
							7	4	1

これまで PC に関連する語の頻度と歴史的変遷を観察することによって一定の傾向を見出すことができた。第一に, man を含む複合語 (manpower, fireman, congressman, policeman) の頻度は軒並み低下している。これは男女平等という社会的な圧力が影響を与えた結果だと思われる。第二に, woman を含む複合語 (firewoman, policewoman, chairwoman, congresswoman) は女性に配慮した形ではあるが, 頻度は極めて低い。これは男性中心の社会における女性の相対的な地位の低さに起因すると思われる。この地位の違いが PC 語に投影され, 女性自身も PC 語の使用を控えるようになり, 中には男性形に威信を感じる人も出てきたと考えられる。第三に, 性差を含まない中立的な語 (humans, personnel, staff, police officer) の使用が増えている。woman を含む語とは異なり, 女性に対する社会的な評価とは無縁であることが抵抗感なく使える要因になっていると思われる。四つ目の特徴として, humans や staff のように音節数が少ない語が好まれるようである。humankind, human beings, human resource などは中立的な語ではあるが, 音節が長いために積極的な使用が避けられているのではないと思われる。また, -person を含む語の使用が意外ほどに少ないが, この点について『ランダムハウス大辞典』(1994)は,

-person の造語は報道機関において -man の代用語として徐々に使われるようになったという一方で、不便であるとか不必要であるという意見も併記している (s. v. -person)。他に代用語がある中、音節数が長いこともあって存在意義に乏しいのであろう。

2. 英語に内在する偏見

上述した chairman/chairwoman や actor/actress などには性差が語に明示されていることもあり、研究者のみならず日本の英語教育界でもよく知られている。その一方、一見しただけでは性差あるいは性差別とは無関係に見える例もある。本節では、日本ではあまり話題に上ることのない、語の背後に潜む性差を扱ってみたい。

Miller and Swift は 'Any politician would have trouble running against a woman' の一文を挙げ、性差のない 'politician' は男性であるという前提で使用される傾向があると指摘している。同じように、隣人夫婦に言及する際、男性に対し 'neighbour' が使われるのに対し、彼の妻には identity として 'neighbour' ではなく、'neighbour's wife' が充てられている例を挙げている (4)。Talbot も doctor, driver, writer のような性差のない名詞は男性と想定される傾向があると指摘している (225)。この傾向は人に限ったことではなく、動物にも当てはまるようである。Miller & Swift は shrike (モズ) と dolphin に he と his が使われている広告を取り上げている。

'Shrike: He often hunts when he isn't hungry—but he doesn't waste the extra food...'

'Dolphin: Probably the most intelligent mammal after man, this friendly and talkative creature has a built-in sonar system of his own.' (58)

このような男性中心的なものの見方は、男女に関わる語に浸透しているようである。woman と man には性差を除いて意味の違いはないように見えるが、前置される形容詞によって異なる含意が生じることがある。Miller & Swift によれば、形容詞が付加された working woman は女性を家庭の役割という観点から定義し、女性は仕事を持たないことを前提としている。working wife や working mother についても同様である。対照的に working husband は稀である (99)。現代英語における頻度は表25の通りである (COCA)。

表25 形容詞を含む対照語の頻度

working woman (847)	working man (568)
working mother (633)	working father (48)
working wife (55)	working husband (6)

working man の頻度は高いが、このうち working man and woman のようにペアになった166例（複数形を含む）を差し引くと、402例となり working woman の半数以下になる。一方、working women and men（単数形なし）は3例のみである。この頻度の違いには、女性が社会進出した現代においても仕事を持っているのは男性であるという考え方が反映されていることを示唆している。

woman は単独では悪いニュアンスはなく、逆に 'independence, competence and seriousness of purpose as well as sexual maturity' (Miller and Swift 94-95) を含意するが、man と比較すると共起する形容詞に違いがみられる。COCA を使って形容詞 + woman と形容詞 + man の連語の頻度を調査すると、woman と共起する語は、女性の identity が男性との婚姻関係で規定される傾向が強いことがわかる。woman と共起する形容詞のうち、婚姻に関わるのは married (1,160), single (1,146), unmarried (304), divorced (137) であるが、man の場合は married (1,001), single (567), unmarried (70), divorced (51) と頻度が低い。形容詞 + man の総語数 (130,881) が形容詞 + woman の総語数 (87,015) の1.5倍程度ある点を考慮すると、married を除けば woman が上記の形容詞と共起する割合は man よりも遥かに高い。特筆すべきは、man は unmarried と divorced との共起数が woman と比べて少ないという事実である。man は単数で扱われるときは、親の庇護下にあることや未熟さ或は妻と関連づけられることなく、一人の自立した個人として捉えられるのではないかと思われる。Oxford Collocations Dictionary for Students of English (2002) (以下 OCD) でも同じような傾向が見られる。man には婚姻関係について single と married の二語しか例示されていないが、woman の修飾語はこの二語に加え、childless, divorced, motherly, unmarried, unattached, widowed など多様である (s. v. woman)。これは woman が夫との関係に依存し、自立した個人として認められていないという考え方が反映された傍証だと考えられる。

woman と同じように、lady も単独で使用されるときは肯定的なニュアンスを持つ。Miller & Swift は、lady は 'a certain standard of propriety, correct behaviour or elegance' (89) を想起させると述べている。しかしながら、肩書きとして用いられると低く評価されるため、cleaning lady は cleaning woman よりも見下された印象を与える。また、lady doctor のように形容詞として用いられると真剣に受け取られない傾向がある (Miller & Swift 90-91)。lady に対する評価の低さは現代英語での頻度の低さが示している。COCA では woman doctor が89例あるのに対し、lady doctor は20例に過ぎない。同じように、saleswoman 443例に対し、saleslady は84例と圧倒的に少ない。saleslady には 'prostitute' の意味もあるが、この意味は lady が帯びている否定的な評価を示す一つの指標と言えだろう。

lady に対する否定的評価は、共起する形容詞を gentleman の場合と比較すると

明らかである。表26は頻度数が高い連語を上位から5例示したものである (COCA)。

表26 形容詞 + lady/gentleman

lady (11,344)	old (2,824), young (2,803), fat (291), little (282), fair (255)
gentleman (1,986)	old (180), young (125), elderly (113), older (111), southern (97)

年齢に関する語の多さは両者に共通するが, lady には否定的な含意を持つ fat の使用が顕著である。gentleman も fat と共起するが4例しかない。poor も両者に共通するが, poor lady 59例に対し poor gentleman は6例である。さらに女性にとって否定的なニュアンスを持つ bearded (65) や crazy (48) は lady とのみ共起する。このような偏向は *OCD* にも見られる。gentleman は perfect, real, true のような紳士の理想を表す評価語しか例示していないが, lady は attractive や charming などプラスの評価語の他に, 高齢 (elderly, middle-aged, old) や職業 (cleaning, dinner, tea) との共起例を挙げている。辞書は模範とされるだけに, このような言葉の偏向は男女間の社会的な不公平を因らずも維持・強化することになる (Holmes & Wilson 347)。

上述したような男女に纏わる差別的な表現に関連して Miller & Swift は興味深い指摘をしている。manly や masculine は勇敢さや気骨など, 多くの人が望むような人間の性質を含意する。しかし, womanly や feminine は優しさや受容力のような前向きな意味を持つ一方で, 弱さ, 癪癢, 臆病, 移り気など, あまり好ましくない性質を併せ持っている, つまり, 女性は人間の欠点を負わされているというのである (84-85)。例えば, woman と結びつく語の中には, old woman のように「些細なことにこだわり過ぎる男性」という軽蔑的な意味を担わされた句もあるが, old man には同様の意味はない。同じように, feminine と語源を同じくする effeminate は男性に対する軽蔑的な意味「男らしくない, 女々しい」を負わされているが, これに相当する男性形 emasculate は女性を軽蔑する意味は担わされていない。いずれも男性中心の観点が反映された例だと言えよう。

女性形が否定的な含意をもつ傾向は男性形と対比すると一層明瞭になる (表27)。

表27 男女の **paired words** (定義は『ジーニアス英和大辞典』に拠る)

King	Queen
国王, 大御所, 神	女王, 王妃, 花形, <u>ホモ</u>
Lord	Lady
君主, 貴族, 神, 有力者	ご婦人, 淑女, 聖母マリア, <u>トイレ</u> , <u>コカイン</u>
Sir	Madam
あなたさま, 卿	奥様, 売春宿のおかみ, 生意気な小娘
Master	Mistress
主人, 精通した人	女主人, 大家, <u>情婦</u>
Bachelor	Spinster
独身の男子, 学士	(婚期を過ぎた) 独身女性, 紡ぎ女

女性形の例はすべて芳しくない意味を一部に持っている。加えて, master bedroom, masterclass, mastermind, master of ceremonies, masterpiece, master's degree など, 男性形はプラス評価を持つ句や複合語として使用範囲が広い。Holmes & Wilson (350, 355-56) は, master plan や master key のような句には男性優位の考え方が潜んでおりとし, main plan や pass key などの代用語を推奨しているが, COCA によると現代英語での頻度は低い (master plan (861)/main plan (4); master key (66)/pass key (17))。bachelor も同様に, bachelor party, bachelor's degree, Bachelor of Arts, Bachelor of Science などでも使用されている。さらに, bachelor と spinster では前置される形容詞に顕著な違いが認められる。表28は各語に前置される形容詞のうち, 頻度数が最も高いものから5つ挙げている (COCA)。

表28 形容詞+ **bachelor/spinster**

bachelor (743)	eligible (169), old (56), confirmed (28), lifelong (26), four-year (15)
spinster (129)	old (19), lonely (6), elderly (5), wealthy (5), middle-aged (4)

bachelor は eligible (結婚適齢期の) や confirmed (独身主義の) のようなプラスの意味をもつ形容詞と結びついている。COCA によると lifelong も learning (487), friend(s) (282), dream (176) など, プラスの価値をもつ語との連語が多いため, 前向きな姿勢を含意する。それに対し, spinster は否定的な意味をもつ語との結合が多い。同じ未婚であっても spinster は結婚適齢期を過ぎた 'older woman' を指すが (*Oxford Dictionary of English*), この定義も結婚をしない女性に対する男性の偏見を反映したものであろう。婉曲語としての新語 bachelorette (531) は, 現代英語では spinster (357) よりも頻度は高いが, 男性形から派生した語であるため,

-essを含む語と同じように、今後は、基準である男性形から逸れた非標準というニュアンスを帯びて使用が控えられるようになる可能性を孕んでいる。形容詞+bacheloretteの連語をCOCAで調べると、45例中、頻度が最も高い形容詞には否定的な意味はないが(new (11), black (6), blonde (5), confirmed (2)), bawdy, shitty, volatileなど侮蔑的な意味を持つ語が一例ずつではあるが使われている。この三語と共起する例がbachelorにはないことに加え、形容詞との共起例が少数であるにもかかわらず女性を見下すような語が既にbacheloretteに付されている事実は、根強く残る差別意識が容易に新語に忍び込む様を映し出している点で注目に値する。

女性に関連する語が否定的な意味を帯びる傾向はメタファーにも及ぶ。Holmes & Wilson (347) は、女性を侮辱するメタファーは男性のそれよりも遥かに多いと指摘し、bitchやcowなどの動物の喩えや性的対象のイメージが強いhoneyやtartなどの食べ物の喩えを例示している。寺澤(2016: 147-56)は、否定的なニュアンスを持つ喩えとして動物と食べ物他に、鳥、魚、植物、もの等の例を挙げて詳述している。

侮蔑的な表現が女性に偏っている傾向は現代英語に特有な現象ではなく、少なくとも古英語期に遡る。Crystalは*The Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary*を使って「娼婦」の意味を持つ語の歴史的変遷を辿っている。それによると、男娼を表す語が10例あるのに対し娼婦は170例である。Crystal (2014: Ch. 10)はそのうち一般的な名詞124語を取り上げて説明を加えている。表29は「娼婦」の語のうち、woman, lady, girlなど「女性」を含む語を例示している。

表29 「娼婦」の意味を持つ語（括弧内の数字は初出年、†は廃語を示す）

woman	brothel woman (c.1386), common woman (1362), public woman (c.1500), † strange woman (1535), † town-woman (1675), † queen's woman (1871)
lady	lady of pleasure (1550)
girl	girl (1662), street girl (1764), girl of the pavement (1900), yum-yum girl (1960), working girl (1968), parlor girl (1979)
その他	nymph (1563), † mermaid (1595), † miss (1606), aunt (1663), † marmalade-madam (1674), † market-dame (1706), † kennel nymph (1771), pavement princess (1976)

Crystalを基に作成

このように長年にわたって続く女性に対する否定的な態度、すなわち男性中心的な考え方は、男性と女性に関わる語がベアとして使われるときの語順にも色濃く残っている。表30が示すように(COCA)、一般的に男性が先頭に立つ。この「男女」の語順は、重要な要素が先頭に立つという原則に従っていると思われる。

表30 男女に関わる **paired words**

man and woman (16,198)	woman and man (1,850)
husband and wife (1,591)	wife and husband (64)
boy and girl (3,209)	girl and boy (685)
brother and sister (3,185)	sister and brother (443)

重要な要素が先行する原則は男女の **paired words** に限らず、例えば **father and son** や **mother and daughter** にも当てはまる。現代英語における頻度を見れば一目瞭然である。

表31 親子に関わる **paired words**

father and son (1,286)	son and father (29)
mother and daughter (1,006)	daughter and mother (25)

これに対し、**ladies and gentlemen** は男性が先行するという原則に反するようにも見える。しかしながら、詳細に見ると男性優位の考え方に則っている。**lady** は元来、「君主」である **lord** に対応する語であった (*Oxford English Dictionary*, s. v. *lady*, 4) (以下 *OED*)。一方、**gentleman** は「生まれが良い者」を原義とするが、貴族には属さなかった (*OED*, s. v. *gentleman*, 1)。つまり、**lady** は上流階級に、**gentleman** は中流階級に属するため、両者を併記するときは身分が高い **lady** を優先するのが必然である。*OED* はユーモアを交えて以下のように説明している。

As the traditional association of *lady* with *lord* still survives, the former is a title of ostensibly higher dignity than *gentleman*. Hence, and not directly as the result of the sentiment of gallantry, the customary order of words in 'ladies and gentlemen'. (s. v. *lady*, 4)

問題はむしろ、**lady** を階級が異なる **gentleman** と併記したところにある。男性優位の考え方が生み出した産物が現代英語では階級差に纏わる原義を失い、所謂レディーファーストの代名詞となっているのは歴史の皮肉である。

3. 結 論

小論では、言葉の表層に表れている性差に関連する語句と、言葉に明示されずに底流する性差の実態を観察してきた。性差別的とされる表現については PC の旗印の下、性差のない表現に改める方向に進んで来てはいるが、それでもまだ男性中心

的な観点が、明示的であれ暗示的であれ、依然として支配的である。英語そのものが性差別的な言語であるかというところではなく、英語使用者の考え方やものの見方が言葉に反映されていると見た方が妥当である。歴史を振り返ってみると、英国社会と英語を形づくってきた人たちの中心は男性であった。アングロサクソン時代は、英雄詩 *Beowulf* や *The Battle of Maldon* に代表されるように男性中心的な時代であった (Hughes 38)。中世以降も家父長制 (patriarchy) を基盤とした社会の中で、中心的な役割を果たしたのは男性であった。政治、行政の分野で記録を残してきたのも、教会を取り仕切ってきたのも、聖書をはじめとする宗教関連の書物や冊子を残してきたのも男性であった。文学作品についても四大詩人に代表されるように、主要な作品を残してきたのは男性であり、Jane Austen など文学史上に残る女性作家が活躍し始めたのはようやく近代後期になってからである。このように、言葉をつくってきたのは男性であったが、更に18世紀には理性と秩序を重んじる時代風潮に呼応するように規範文法が規定された。anyone や everyone のような性差のない語は男性形の he で受けることが正しい用法とされ、男性中心の考え方が英語に刻印された。その後も文法家の大半が男性であったため、この傾向は現在まで続いている (Baugh & Cable 338)。男性に偏向した用法は1980年代以降修正されてきたが、長い年月をかけて地層のように堆積してきた偏りを正すのは容易ではない。

言葉は生きているため男性形に対する抵抗感も語によって異なり、一律に改めることはできない。例えば、policeman は -man を含むため、女性警察官に対して使うことを躊躇する人は多いと思われるが、freshman に対する抵抗感は遥かに少ないようである。COCA によると freshman の頻度12,335例に対し、first-year student は332例に過ぎない (複数形を含む)。COHA によれば、freshman は1990年代の360例から2000年代の588例に増加しているが、first-year student は同時期にそれぞれ4例と12例しか見られない。一方、誤解に基づく変更も行われた。woman は女性であるのに -man を含んでいるため wimmin や womyn のような形も考案されたが、woman は元来 wifman 「女の人」という意味であって -man は「男性」ではなかった。同様の変更は herstory という造語にも当てはまる。history はラテン語の historia ('narrative of past events': *OED*) に遡り、人称代名詞とは全く関係がない。更に、actor/actress のように簡単には解決しないと思われる問題を抱えている語もある。Baugh & Cable は、actress が他の -ess 語よりも生命力がある理由として、アカデミー賞が男女それぞれに授与されている点を挙げている (339)。女優の中には actress を避け actor の呼称を好む人もいるため actress の使用頻度は低下し、いずれは廃用に向かうとも考えられるが、Academy Award for Best Actress が Academy Award for Best Actor に統一されれば、受賞者は男女合わせて一人となってしまう。actress が持つ価値が actor より低いとしても、Academy Award for Best Actress の廃止を

望む俳優は男女共に少ないと思われる。

言葉の修正に向けた二つ目の問題点は、前節で論じたように性差が明示されない表現である。言葉は幼少期には特に意識することもなく習得されるため、性差に偏りのある表現には気づきにくい。仮に気づいたとしても、長い歴史の中で幾重にも重なった古層を形成する言葉を変えるのは容易ではない。例えば、女性形のみに見られた否定的な意味を取り除いたり、husband and wifeのように固定した語順を変えたりすることは、語感に関わるだけに容易ではない。

三つ目の問題点は、男女平等を求める努力が男性の基準に合わせる努力にすり替わってしまう可能性である。例えば、米国の映画界では女優の方が社会的評価が高く、それに比例して報酬も高い。この現実が投影されたactorをactressよりも好む女優は、男性の基準を標準的な価値として追い求めることになる。congressmanを好む女性も同様である。女性が男性と同じ権利を求め、同じ立場に立つという意味で平等を求めるのであれば、本来の目的から逸脱してしまう危険性を孕んでいる。言葉は社会の変化や人の考え方を反映するため、性差に関する表現は男女の平等に関する議論が今後どのように展開するのかという問題と深く関わりながら変化すると考えられる。性差別のない言葉を推進する主唱者は主にフェミニストであるが、挑発的な方法も含めた戦略で男性中心の英語を阻止しようとする立場、女性中心の言葉づくりを重視する立場、そして言葉の平等を求めて代替表現をつくる立場があるように、彼女たちの戦略は様々ではない。三つ目の立場が優勢になりつつあるが(Pauwels 562)、男性は女性よりも男性優位の表現を性差別的とは受け取らない傾向がある中(Holmes & Wilson 355)、そして既得権益を失うことになる男性の抵抗が考えられる中、立場の異なる男性と女性が平等な社会の実現に向けて描く展望が、言葉の変化の行方を大きく左右すると思われる。

コーパス

Corpus of Contemporary American English (COCA).

<<https://www.english-corpora.org/coca/>>. Last accessed January 2020.

Corpus of Historical American English (COHA).

<<https://www.english-corpora.org/coha/>>. Last accessed January 2020.

参考文献

Baugh, Albert C. *A History of the English Language*, 5th ed. (London: Routledge, 2002).

Carter, Ronald & Michael McCarthy. *Cambridge Grammar of English* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006).

Crystal, David. *Words in Time and Place: Exploring Language through The Historical Thesaurus of The Oxford English Dictionary* (Oxford: Oxford University Press, 2014).

———. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 3rd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 2018).

Holmes, Janet & Nick Wilson. *An Introduction to Sociolinguistics*, 5th ed. (London: Routledge, 2017).

Hughes, Geoffrey. *Political Correctness: A History of Semantics and Culture* (Oxford: Wiley-Blackwell, 2010).

Knowles, Elizabeth & Julia Elliott. *The Oxford Dictionary of New Words*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1997).

Miller, Cathy & Kate Swift. *The Handbook of Non-Sexist Writing for Writers, Editors and Speakers*, 2nd ed. (London: Women's Press, 1989).

Merriam-Webster.

<<https://www.merriam-webster.com/words-at-play/word-of-the-year>>.

Pauwels, Anne. "Linguistic Sexism and Feminist Linguistic Activism," in *The Handbook of Language and Gender*, ed. Janet Holmes and Miriam Meyerhoff (Oxford: Blackwell, 2005), pp. 550–70.

Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds., *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989).

Swan, Michael. *Practical English Usage*, 4th ed. (Oxford: Oxford University Press, 2016).

Talbot, Mary M. *Language and Gender*, 2nd ed. (Cambridge: Polity Press, 2010).

寺澤盾『英語の歴史—過去から未来への物語』中公新書, 2008年.

寺澤盾『英語の単語—多義語と意味変化から見る』中公新書, 2016年.